

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成20年5月 第87号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

主役として人生を終えたい

老いの理想はピンピンコロリ、と言う人がいます。しかし、老いの過程で何時までもピンピンしている事は中々に大変な事です。40才を過ぎると、大半の人が何処かに老いを感じるもので、近眼であった人が遠近両用の眼鏡が必要になり、階段の上がり降りが苦痛になったりします。忍び寄る老いは、誰しもが実感します。ピンピンコロリは不自然です。

そして現実には、ピンピンとコロリの間平均して7～8年の要介護の期間が存在します。それが無ければ良いな、という強い願望が透けて見えますが、現実には必ず来るであろう事を殆どの人が知っています。

ピンピンコロリの真意は、老いても主役のままで人生を終えたい、という処にあるのだと感じます。要介護になった時には家族や介護者が判断を下し、自分が主役として判断できない、という現実を沢山見てきた結果です。しかし、ある日突然コロリと逝くと、それが主役に相応しい幕引きになるのでしょうか。老いて主役として人生を終えるとは、どういう姿でどういう役割を果たす事なのか、今一度深く考えたいと思います。

近年、死の回避を医療に期待する人々が増えた結果、高齢者医療費が増大し、医療保険制度の見直しが提起されました。そしてその『後期高齢者医療制度』への批判が高まっています。『姥捨て山』との批判や、『年寄り早く死ねというのか』と書いたチラシが配られていました。『後期』の表現や、個人毎の年金からの天引きも不評です。そして、長寿医療制度と呼び名をかえましたが、何か議論の焦点がぼやけているように見えます。

「後期」の表現の良し悪しはとも角、75歳を越えた人は現実的に『死』と向き合っています。其処で『医療』に何を期待するのか、についての判断が求められています。老いと死は自然の摂理であり、『宿命』として避けることが出来ません。主役として宿命をどう受け止め、どう過ごすか、の問い掛けに答えなければならないのです。



(次ページにつづく)

せいりょう園 渋谷 哲

(前ページのつづき)

種の保存は生物体の最も基本的な本能です。懸命に生き抜いて、一人ひとりが自らの遺伝子を子孫に引き継ぐ義務と責任を負います。まさに主役です。そして人は概ね、50歳を超えるとその責任からは開放されます。遺伝子で伝えるだけなら『人生50年』で充分です。『人生80年』の時代になり、後半30年の意味と価値と役割が問われています。

今まさに『後期高齢者医療制度』は、75歳を超えての数年間の主役としての役回りを問い掛けています。本能として子孫に遺伝子を伝える役目を果たし終えた後、宿命としての『老いと死』の役目を果たす番です。

まず一番に、老いて死を迎える過程を見せることが必要ですが、コロリと逝ってしまうと、何も出来ません。そしてその次の段階として、どういう姿を見せるか、が問われます。老いの必然として様々な機能や役割を喪失する姿を、否定的に捉えるのか、肯定するのか、に分かれます。喪失から死に至る過程で、本人も家族も多くの苦悩や葛藤や絶望を経験します。その中で、それを避けたいとの願望を優先する人達と、受容と諦めを学び毅然として宿命を受け容れる人達がいます。

今、少子化に歯止めが掛からず、育児を放棄する人達が増え、この10年間で、自殺者が年間3万人を超えています。人が社会を形成しながら逞しく生きる為の、最も基本的な本能を否定する人達が増えています。一方で、宿命としての老いと死を否定し、生きる権利を主張する高齢者が多数います。アンチエイジングが流行です。

本能と宿命は、単に個人的な権利に留まらず、人間の営みとしても、社会的な存在としても、連なっています。人は何の脈絡もなく忽然と生まれて死ぬのではなく、何代にもわたり不思議な『縁』が連なる、大きな生命活動の一端として存在します。本能と宿命の繰り返しの中で、連綿と続く生命活動を一人ひとりが主役として担っています。

後期高齢期は、まさに主役として自らの幕引きを演出する舞台なのだと思います。主役として人生を終える為の、最も重要な暮らしが其処に在る事を自覚し、医療に期待するものや『後期高齢者医療制度』について考え、自分なりの答えを出したいと願います。

『楢山節考』では、山に捨てられた姥が使っていた細帯や綿入れを、すぐさま孫たちが使用している暮らしが、哀歓を交えて描かれています。其処では、逞しく生きる息子や孫の暮らしの中で、姥は生きています。宿命を背負い山で死と向き合う姥を思い遣る心が、暮らしに向き合う力を支えています。

老いによる様々な喪失を宿命として肯定し、遺伝子情報に従って毅然と死を受け入れる姿が、本能としての出産・子育て、そして逞しく生き抜く力を育むのではないかと強く感じます。

遺伝子では伝えきれない大切なものがあり、それを暮らしの中で伝えるのが、宿命を背負う主役の最も重要な役割なのです。現在の社会で、老いて主役として人生を終えるには、要介護になり『死と向き合って暮らす時間』が必要なのだと実感しています。



地域支援センターのぐち南

社会福祉士 吉田 知一

4月1日から始まった後期高齢者医療制度ですが、ご存知のとおり新たに発生する保険料の負担や後期高齢者を限定とする徴収方法に疑問の声が上がっているようです。加古川市の駅前でも「お年よりに早く死ねというのか！」と書かれているインパクトの強いチラシが配られていました。テレビの街頭インタビューでも同じようなことを言っている人もいますよね。おだやかではないです。

地域に出て、皆さんの話を聞く際にもこの後期高齢者医療制度がどういった制度なのかを聞かれることがあります。この制度を皆さんはどのように捉えているのだろうか。なぜこの制度がこうまで言わせるのか。ただ、保険料の負担が発生することに怒っているのだろうか。いや、そんな単純な問題ではない。この問題は単に財源だけの問題ではないような気がします。窓口の負担や、保険料の額だけではなく、私達が知っておかないといけない事がもっと他にあるのではないだろうかと思うのです。私自身、今回の後期高齢者医療制度を説明出来るようになるため勉強していく内に、いろいろ分かったこと、感じたことがありますので、そのことについて書きたいと思います。



私が勉強したこと感じた事とは2点あって、一つは日本の医療を受ける体制です。消費税5%と低所得者には軽減措置のある保険料で世界でもトップクラスの水準、必要な時に必要なだけ医療を受けることが出来るということは、各国の医療体制と比べて非常に恵まれているということが分かりました。

アメリカの医療保険は、ほとんどが民間保険で会社によって保険料も違いますし受けるサービスも様々です。疾患名によって保険金がおりにない病気があったり手術が保険適用していないものがあり、それぞれに高額な保険料が設定されています。かなりシビアです。中には、高額な保険料が払えず手術が必要な病気を患っていても我慢している人がいるのが現状です。だから、健康、予防ということにアメリカは敏感です。日本でも流行したビリーズブートキャンプ※が流行るのも分かります。スウェーデンなどの北欧の国では医療費の多くは公費負担、つまり税金で賄われていますが、消費税25%です。こういった国々では積極的な延命や、老いからくる慢性的な疾患に対して積極的な医療は制限されるものであるというのが通念であるようです。生活習慣病に関しても自ら予防するものであるという認識が当たり前のようです。 (次ページへつづく)

※ビリーブランクスが軍隊基礎訓練を基に考案した短期(7日間)集中型エクササイズ





では日本の医療は、こういった歩みをしてきたのか。今の人口ピラミッドを予想しながらも1973年から10年間も高齢者医療が無料でした。その後も一部負担金のみの医療制度を続け、ようやく2002年老人医療が完全定率化（1割負担）となったようです。こういった、医療体制により、世界の中でも平均寿命ナンバー1の長寿大国になったのです。それと同時に、亡くなる方の8割が病院で亡くなり、高齢者医療には11兆円が使われているという現実もあります。日本医師会の調べでは医療機関で死亡前一ヶ月の平均医療費は112万円であるとのこと。ここで気をつけないといけないのは病院死＝悪、では決してないと思います。病院でも家でも大切なのは自然な最期とケアの質だと思っています。問題なのは選択肢が物理的にも心理的にも無くなってしまったことだと思います。

私が勉強したこと感じた事のもう一つは、どんなに医療が発達しても人間の命には限りがあるということです。正直、老いの不安とはこういったものか、私にはまだはつきりとは実感できません。その不安に対する対処法は今のところ医療が最良の方法と考えている方が多いようです。もちろん病気ではないので特に治療もありません。納得する治療がされるまで、納得する病名がつくまで病院を受診しているのが現実で、不安はさらに深まるばかりです。そんな時にこの後期高齢者医療制度です。「早く死ねというのか！」となるのも頷けます。



この人がどうやったら救われるのか。この人の不安がどうやったら小さくなるのか、制度を変えたら救われるものなのか、医療が救ってくれるものなのか。

この制度に隠されたメッセージは、死ねと言っているのではなく、死に向き合った上で一生懸命生きてください、生に向き合ってください、与えられた寿命を全うしてくださいということではないかと思います。この寿命というのは自然に亡くなるということ、不自然に過剰な医療で延命をすることが自然な寿命ではないということだと思います。この本質の部分の説明をなされていないから「死ねと言われている」と捉えてしまう人がいる。

もし、後期高齢者医療制度の話をする機会があれば、窓口の負担や保険料の話だけでなく、この制度の隠れたメッセージを伝えることが出来るようにもっと勉強したいと思います。



せりょう園待機者状況 <平成20年 5月20日現在>

判定済み者 279名の内訳

グループ... 106名

グループ... 109名

グループ... 57名

計272名

入所... 3名

死去... 3名

他施設入所... 1名

判定済待機者 272名の内訳

在宅99名 / 特別養護老人ホーム入所中6名 / 医療機関入院中68名

老人保健施設入所中87名 / ケアハウス入居中4名

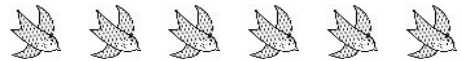
グループホーム入居中7名 / 有料老人ホーム入所中1名

介護現場発信情報

～かけがえのない^{ひととき}一刻を～

特養より

碓谷 知可



私がせいりょう園の職員になり、もう2年経ちました。
さまざまな出会いや別れを経験し考え方が変わった部分もあれば、変わらない想いもあり、少しは強くなったかなと思う面もあれば、まだまだ無知で分からないことがたくさん見えてくることも増えました。

ユニットが出来て特養本体は2階での生活が始まりました。業務も次から次へと変えていかなければならない状況に私自身ついていけないのが現状です。そんな中、一人の利用者の方が家族に看取られながら亡くなりました。褥瘡や下顎呼吸で苦しみ、点滴で栄養を送ろうとするも低栄養状態は改善されず、浮腫もひどくなり、やせ細っていく体を見てもう頑張らなくてもいいよと思うこともありました。家に帰り、本当にこれでよかったのか、もっと何かできていたんじゃないか、家族が安心できるような納得できるような声掛けができていたんじゃないかと悩みました。その日は私にとって現状を見つめなおす大きな別れでもありました。

最近仕事、業務、介護そればかりで過ぎていくように思います。お年寄りが職員に声を掛けたくてもみんなバタバタ。私自身も当てはまるし、職員同士のコミュニケーションが少なくなったなということです。職員が少ないから～ができないという諦めは言い訳であって、少ない中でお年寄りとうどう接していくかが大切だと思うし、職員同士話し合えば工夫すれば時間は作れるものだと思います。以前のように業務内で散歩に出かけたり、一人でも多くゆっくりと入浴できる環境を取り戻したいし、もっともっと中身のある関わりをしていかなければと感じています。介護って、ただ単に業務をするだけが介護じゃないんだと改めて感じるようになりました。オムツ交換や、食事介助や入浴介助やそんなサービスだけでなく、そこに笑顔がほころぶ介護が必要なんだと思います。

様々な思いをもったお年寄りに一人ずつ、少しずつたとえその瞬間だけでも自然と笑顔が出てくるような、そんな介護をしていきたいです。言うのも思うのも簡単ですが、どう実行していくかが今の自分の課題でもあります。



ユニットより

ユニット調理員

山本 乃利子



私がユニットで仕事を始めて、8ヶ月が経とうとしています。
立ち上げからなので、全く分からないことだらけでした。戸惑いや不安もいっぱいありました。私は厨房職員で、身近にお年寄りが来られたり、直接話しかけられたりというのはあまりないことだったので新鮮といえば新鮮ですが、たまに

右見て左を見たらあるはずのおかずがなくなっていたり、おかずを口いっぱいに入れて、ニコッと嬉しそうにされている顔を見たら怒れない自分がいました。

ユニットでは家庭的な雰囲気の中で、なおかつ個室なのでプライバシーも守られながら生活できておられます。その中で入居者の方はとても自由です。笑いたい時は笑い、泣きたい時は泣きわめき、一人で怒っていたり、人にやつ当たりしたり、十人十色だなあと感じました。私には30人の入居者の方々はとてもかわいい感じがします。本当は失礼にあたり、その表現はダメなのかも知れませんが、その言葉しか思いつきません。

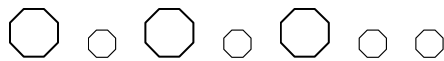
また、身近で介護している職員の仕事ぶりなども感心させられる毎日です。ある意味死と隣り合わせの方もいます。夜勤の時は大変だと思います。これから元気になっていかれる方はほとんどおられません。現状維持か低下していくかになります。

生きていく上で食事はすごく大切なことだと思います。私たち調理員に出来ることは、安全でおいしく食べて頂けるように工夫をしていくことだと考えています。行事の時には目で見て、楽しんでもらえるように、季節に合った食材を使う時は素材を大切に……。入居者の方が食事を楽しみにして下されば、それが一番嬉しいことです。

最後にユニットで働いているのが、今は自分らしいと思えるようになりました。それはユニットが本当に家族に近く感じるからだと思います。私も家族を持っているので家におじいちゃん・おばあちゃんがいたらこんな感じだろうと思います。入居者の方にも「ここが私の家だよ」と言って頂けるように頑張っていきます。



仏教講話より



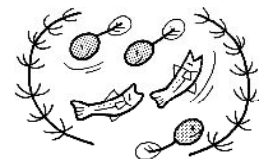
デイサービス 谷澤 高明



機関紙に仏教講話について寄稿を始めて五回目になる。講話をしてくださるお寺の宗派も当然増えてくる。浄土真宗、臨済宗、曹洞宗、曹洞宗と続き、今回は真言宗。加古川市加古川町大野にある常楽寺の宮崎隆和ご住職にお越し頂いた。

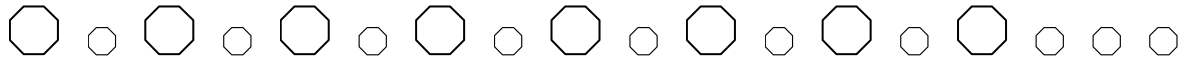
例によってインターネットで事前に検索。『加古川市の石造美術：常楽寺/石造宝塔・五輪塔二基(県指定文化財、鎌倉時代後期)』と紹介されている。

今回は春の気まぐれな天候のいたずらか、生憎の悪天候で参加者もいつもより少なかった。



まずは「常楽寺」の紹介から講話は始まる。

「常楽寺という言葉が古文書の中にも見られ、一説には宝塔はもんかん和尚が母の供養塔として建立したものだとも言われています。和尚は日岡に生まれ京都で修行された高僧です。」



続いて真言宗のお話に移る。

「加古川市には76ヶ寺ありますが、私共の宗派は真言宗です。ご存知の通り総本山は高野山にあります。行かれた方は気付かれたかもしれませんが、高野山は他の本山とは一風変わった独特の雰囲気があります。大概のところはそれらしく、厳かな感じを受けるものですが、高野山の場合は、付近にいろんな形態の物(店)が雑然と混在しています。これは教祖であります弘法大師が布教していった経緯によく似ています。弘法大師は『良いものも悪いものも、正しいものもそうでないものも全てに意味があり、お互いに関係しあって世の中は出来ています。いろんなものがあって世の中は成り立っているんです。』そして大師はこうも言われています。『仏教は遠くにあるのではなく、自分の身体の中にあるんですよ。だから自分を大事にしなくてはなりません』と。

私はこちらで開かれている音楽会に何度か伺っています。その際、素敵な音楽、展示されている沢山の作品を目にすると本当に豊かな気持ちにさせられます。自分を大事にし、自分を豊かにすることが如何に大切かと感じます。いいもの、ありがたいもの、手の届かない所にあると思われているものを自分の中にどれだけ見つけ出し、それを磨いて表現していくことが出来るか。これが大変難しいことでもあるんです。」

ここで質問を受けられた。この事は初めての展開で一瞬戸惑いそうになったが、参加者のお一人から大乘仏教と小乗仏教の相違を聞かれ、「大乘仏教・小乗仏教とは本来優劣をあらわしているそうですが、端的に言いますと小乗仏教は戒律を厳格に守り、修行を重ねて仏に近づこうとし、大乘仏教はやりたい放題では駄目だが余りに厳しい戒律を求めず、誰にも仏になる素養があるとします。前者はタイ、ミャンマー、カンボジャ等、主に東南アジアで盛んで、後者は中国、朝鮮を経て、日本に伝わってきました。」と答えられた。

本講話の回を重ねるごとに仏教そのものの間口の広さと奥行の深さに戸惑いを感じさせられるところでもあります。

真言宗・空海・弘法大師と聞くと何十年も前に習った歴史の授業を思い出します。9世紀のはじめ最澄、空海が相次いで唐から戻り最澄(伝教大師)は比叡山に延暦寺を空海(弘法大師)は高野山に金剛峰寺を建立。特に真言宗は時の嵯峨天皇の保護を受け京都に東寺を与えられ、貴族の間に広く受け入れられた。その後台頭してきた武士や庶民を対象に新しい立場から仏教を説く宗教家が現れた。鎌倉新仏教の誕生である・・・・・・。

も一度、勉強が必要のようです。

